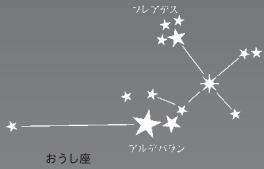


ポラリスを仰ぐ北の大地から



2022年を振り返って

三笠市医師会 会長 いしぐろ としふみ 石黒 敏史

年も明け卯年。いつもの事であるが、今年が良い年でありますように。

昨年は色々と難題の多い年だった。ロシアのウクライナ侵略行為。そして旧統一教会と日本をリードしてきた？してゆく議員との詳細な関係が明らかになるにつれ、彼らの立場や影響力を考えると程度の差こそあれ、売国行為との誹りは、免れない行為。など今後も注視が必要だ。

さてコロナもさっぱり収束する気配はみられず、寄せてはかえす大波・小波の如く流行を繰り返している。初期の頃のように皆過剰に反応する事はなく、行政側も“経済も回さねば”、と消費upを狙いGoTo何とかを？仕方がないというべきかコロナ感染者は増えてしまった。幸い重症化・死亡率は少ないが、他疾患の患者さんや医療側には、不便・不都合の場面が数多く見られている。

私の子供・孫20人中半数がコロナ感染、皆症状は軽くて済んだ。コロナの収束は難しいとはいえ、医療機関機能不全のため「救える命も救えない」とはならぬよう、我慢と覚悟・知恵を出し合い効果的な対策を講じて行かねばならない。

最近SDGsという文言をマスコミ等によく見聞きする。「持続可能な開発目標」の英訳頭文字らしい。2015年の国連総会で採択された「2016～2030年までの国際目標17項目」がGOALとして示されている。17項目の多くが、大気中CO₂の増加に伴う地球温暖化・異常気象と強く関係している。産業革命以後CO₂が漸増していることは事実である。自然災害が多発との報道も散見され、そのため企業の売上増やイメージアップを狙い、盛んにCO₂削減をアピールしているが、一方では「不知足」とも言える消費・経済活動の推進を計り、目先の都合で自分たちを合理化しているのでは、CO₂削減できるのかい？と欲してしまふ。

目の前にたくさんの墓石が立ってからの「墓石行政」となる前に「日本・世界のリーダー」たちには矜持を捨てることなく頑張ってください。2023年年少しでも良い方向へ跳んで欲しいと願っている。



おもしろうて やがて悲しき

美唄市医師会 会長 い ど あきら 井門 明

最近岐阜市の長良川の鵜飼を観覧する機会があった。鵜飼とは、ご存じのとおり夜間に船首にかがり火を焚いて、鵜を巧みに操って川にいる魚を捕る漁法である。古事記や日本書紀にも鵜飼に関する記述があり、長良川の鵜飼は1,300年以上の歴史があると考えられている。鵜飼観覧を最初におもてなしの手法として取り入れたのが、織田信長とされている。松尾芭蕉は、鵜飼観覧の際に「おもしろうて やがて悲しき 鵜舟かな」と詠んだ。これは、楽しく観覧した鵜飼が終わって、鵜舟が遠ざかっていく時の悲しさを表現しているそうである。喜劇王のチャールズ・チャップリンは1936年と1961年の2回長良川鵜飼を観覧しており、ワンダフルと連呼し、鵜匠をアーティストと呼んだそうである。

ところで、長良川の鵜匠は「宮内庁式部職鵜匠」という特別な国家公務員であるということを知った。長良川の御料場という特別な場所で御料鵜飼を行って鮎を捕り、天皇陛下に献上されるそうである。長良川鵜飼の鵜匠は6人のみである。鵜匠は世襲制で、鵜匠家に生まれた男性にのみ承継が許される。その家に男子が生まれなければ、途絶えてしまう危険性がある。しかも、一家に一人のみが鵜匠として仕事をするのが許され、先代が引退しない限り息子がその跡を継ぐことができないのである。代々、伝統技術や道具が伝承され、歴史的財産を守るためにも世襲制が必要であったのであろうか。鵜の立場からすると、せつかく呑み込んだ鮎を喉元から吐き出させられるのも可哀想な気もするが、未だ男子を授かっていない鵜匠がいるとすれば、さぞかし喉元を絞められるようなストレスに晒されているのではないかと、余計な想像を巡らしてしまうのである。医業承継とどちらがより困難であろうか。